硫黄沢

佐藤　健

■山行年月日:2019 年 8 月 12 日
～13 日

■メンバー:佐藤　健　他1

昨年の北岳バッドレスを親子で登ってから、今度は沢でたき火をし、できればその火には木の枝に通した魚がかざしてあるという山行をしたいと考えていた。本当は 2 泊でもっと奥深い山に入りたかったのだが、都合で 1 泊になってしまった。魚がいる手頃な沢がないかと齋藤憲一さんに相談したら、ある程度標高もあるのでたぶんメジロも少ないはずだと、硫黄沢を紹介してもらった。(流石です。メジロはあまりいませんでした。)凜一にとって沢登りは 3 回目、泊を伴う沢は初めてだ。川越に移転した秀山荘で沢靴やスパッツを買ってきた。

七入駐車場 8:30 出発。すぐに実川に入渓 8:35。硫黄沢出合 8:45。しばらく歩くと砂防ダムが現れる。そこを右岸から巻いてコンクリートの上に立つと、ダムに貯まっている水に透けて小さな魚影が見えた。しばらく河原を歩いていくと、釜を持った小さな滝が出てきた。早速、息子が釣り糸を垂れる。いればすぐにヒットするはずだが、なかなかヒットしない。「いないのか」と思ってそろそろ移動しようかと思ったら小さなものがかかった。リリースサイズだ。いるにはいるらしい。滝はいくつか出てくるが、水量が少ないせいか蛇滝8m(14:20)を少し戻って右岸の踏み跡から巻いた以外は比較的容易に登れるか、簡単な巻きだった。歩いているより竿を出していた時間の方が長いかもしれないのでコースタイムは参考にしないで欲しい。ここからも滝はいくつか出てくるが水量が少なく 2 段 5mの滝で、一応ロープを出す以外は、問題なかった。その先の 12m滝は、左岸のとりつき付近には軟鉄の新しいハーケンが刺さっている。その上にも残置ハーケンが 2 本見える。凜一トップで難なく超える。時間は15:00だ。そろそろテン場を探しながら歩くことにする。ちょっとしたゴルジュを抜けて広くなると、右岸に河原から 1mくらい高い平坦な優良物件を見つけたので、ここに決める。

タープを張った後は薪を集め、たき火の準備だ。釣果を塩焼きにしていただく。息子は「うんめえー」を連発し日本酒が進む。骨にわずかに身が残っている岩魚にすることといえばただ一つ。熱燗を注ぐこと。これまた「うんめえー」だ。息子は自然の恵みを堪能し、心地よい眠りについていった。

イワナにかぶりつく

最後の２ｍ滝でルーフにチャレンジ

翌日は 9:30 出発。すぐ上の釜を持つ流れ込みに餌を投げる。留守番している妹と母へのお土産を捕るというで、今日ものんびり歩くことにする。サイズはあまり大きくないが、魚影はよく見かける沢である。ここから先も困難なところはない。長い河原歩きが続く。凜一は、巻けば濡れなくてよい滝に、敢えてシャワークライミングをしたり、最後の 2m滝では釜にできたルーフを見つけてトライしたり（ズブズブの礫岩では、登れるはずもないが）、結構、遊び心を出して楽しんでいた。この滝のあとは、硫黄沢の名のとおり、だんだんと石の色が茶色になってきた。石の色が茶色になってからも魚影はあった。源頭に近づいているので竿を出すほど広くはないが。道路に出て遡行終了(14::40)。沼山峠まで 30 分歩いて、登山道を小走りで七入駐車場まで下る（16:45）。

自分で沢靴等を買そろえた息子と今度は、どこへ行こうか。今度はもう少しクライミング要素が入った方がいいかな。

＜おまけ　シカのこと＞

今回の山行で特筆すべきはシカについてである。2 日目。硫黄沢の河原を歩いていると上流から下流に向かって、我々から 10 mほどしか離れていないところをニホンジカがものすごいスピードで走り下っていった。また、沼山峠から七入へ下る登山道でも遠くに 2 頭のシカを見かけた。その他に、目撃はしていないが、沢の中と道路に出てからの 2 回、かなり大きなガサガサという音を聞いた。沢の中でシカの糞も見た。写真は、長池の少し上でミズバショウを食べ荒らした跡だ。おそらくシカであろう。尾瀬ヶ原のニッコウキスゲがシカに食べられているという報道は TV や新聞で見聞きしていたが、こうやって目の当たりにしてみると、事の深刻さが実感できる。

シカに食い荒らされたミズバショウ